

第29回 IGC 科学プログラム委員会報告

久城育夫¹⁾・松本 良²⁾

はじめに

科学プログラム委員会報告としては別に英文の正式報告書(I. Kushiro: Report of the Scientific Program Committee)があり, その中でシンポジウムのハイライト, 注目すべき講演等については詳しく述べられている. 従ってここでは, シンポジウム内容については特にふれず, 科学プログラム委員会の組織と活動について述べたい. 今回のような大きな国際会議は地球科学の分野でははじめての経験であり, そのためプログラム作成段階において, 予想していなかった問題や, 見通しの甘さ, 連絡の行き違いなどから多少の混乱があったことは否定できない. どのようにしてプログラムが編成されたのかを多くの方々に紹介すること, および今回の様々な経験をあとに残すことが本報告の目的である.

組 織

科学プログラム委員会は地球惑星科学の25の分野からそれぞれ2~5人ずつ参加, 計約100人のプログラム委員によって構成された. 各分野毎に一人の代表委員をおいた. 代表委員はそれぞれの分野が関係するシンポジウムのコンピーナーへの連絡, プログラム委員会との中継をする事になっていたが, 準備段階途中での代表委員の交替, 連絡の不徹底などにより, 必ずしもうまく機能しない場合があった.

プログラム委員会内には, 久城育夫, 石原舜三, 上田誠也, 歌田 実, 大本 洋, 平 朝彦, 鎮西清高, 坂野昇平, 水谷伸治郎の9人からなる運営委員会がおかれ, 全体委員会で討議されるべき問題の原案の作成などが行なわれた. また別に幹事会(吉田鎮男, 歌田 実, 鳥海光弘, 棚部一成, 島崎英



写真1 講演会々場, 努力のかいあって過去のIGCに比べて異例ともいえるほどの高出席率であった.

1) 東京大学理学部; 科学プログラム委員長:
〒113東京都文京区本郷7-3-1

2) 東京大学理学部

キーワード: 万国地質学会議, プログラム小委員会



写真2 ポスターセッション会場、多くの人々が熱心に討議し、講演より実のある討議ができると評判であった。

彦, 松本 良)がおかれ, 委員会で決定された方針に従い, 実際のプログラム作成にあたった。プログラム委員会には他に, ワークショップとショートコースを担当する委員, 特別シンポジウムを担当する委員がおかれ, また, IGC 組織委員長, 事務総長, 事務局長, 会場委員長が随時全体会議に出席して討議に加わった。

準備期間中, プログラム全体委員会は3回, 代表委員会は8回, 運営委員会は10回開催されている。

メインテーマとプログラムの構成

第29回 IGC は, はじめて島弧で開催される IGC であり, 島弧とその周辺地域への巡検も多数準備されていたため, メインテーマを“島弧の起源と進化”とすることは早い段階で決っていた。島弧の起源と進化を理解するためには, グローバルでかつ地球史的タイムスケールでの議論が必要である。そのため, 地球の起源, 大陸と海洋, およびマントルの進化, 生命と生物圏の起源と進化, 惑星科学が, メインテーマを肉づけするテーマとして選定された。さらにそのほかの重要な問題として, 人類の生存に必須な環境, 災害, 資源, エネルギーが加えられた。

プログラム構成は, 上にあげた重要テーマを扱う特別シンポジウム-A, B, これらに密接にリンクした問題を扱うシンポジウム I-1, I-2, より広い範囲のトピックスを扱うシンポジウム I-3, より限定された分野のトピックスを扱うシンポジウム II か

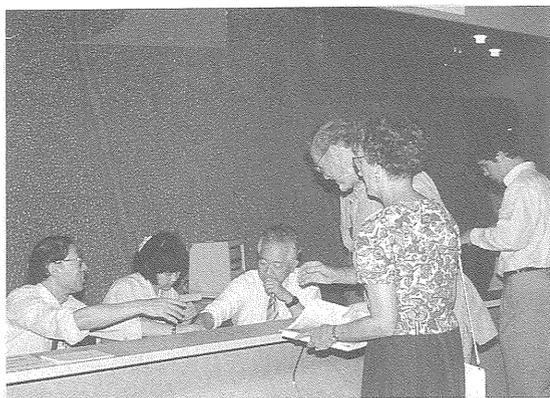


写真3 講演受け付けデスク。左側久城, 右側坂野昇平氏。

ら成ることとなった。この他, 国際プロジェクトの成果について討議するシンポジウム-C も準備された。特別シンポジウムは口頭発表のみ, シンポジウム I と II はいずれも口頭発表とポスター発表の2本立てとすること, 口頭とポスターの別は論文の質による区別ではないこと等が確認された。シンポジウム II は, はじめに述べた25の分野に対応する25部門からなり, それぞれの部門で5~10のシンポジウムが準備された。

プログラム委員会の活動

プログラム委員会が正式に発足したのは, 1989年ワシントンでの第28回 IGC のあとであるが, その前, 1987-88年, 飯山委員長による準備委員会があり, テーマ等についての議論がされていた。プログラム委員会の活動は, 1: 正式発足から #2 サーキュラー発送まで, 2: プログラム編成と #3 サーキュラー発送まで, 3: 会期中の3つの時期に分けることができる。

1: #2 サーキュラー発送まで

この時期にプログラムのメインテーマ, プログラム編成の大枠, シンポジウムのタイトル等が討議された。それらは第一次案として #1 サーキュラーにまとめられ, 1990年3月, 国内, 国外の研究所, 大学, 学協会へ発送された。第一次案に対しては, どのシンポジウムに論文を発表する用意があるかと言うアンケートへの返事のほか, 新しいシンポジウムの提案, コンビナーをしたい旨の申し出など様々な反応があった。それらに基づいてシンポジウム

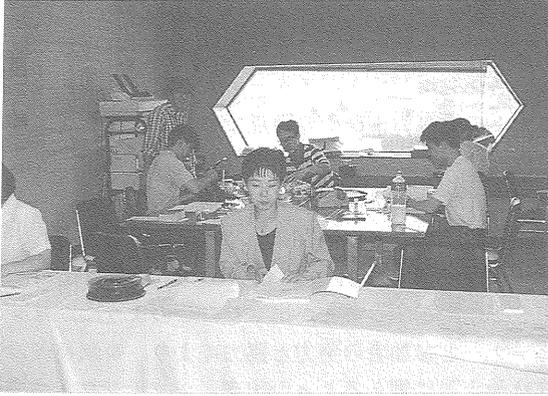


写真4 会場6階のスライド受けデスク。



写真5 会場6階のスライド保管室。

案の見直し作業が行なわれ、またコンビナー(原則として日本人1人、外国人1人)が決められた。その結果シンポジウムの数は244となり、これが1991年2月、#2サーキュラーとして発送された。#2サーキュラーには登録用紙や、アブストラクトの用紙がとじ込まれ、アブストラクトの事務局締切りは1991年12月1日とされた。

2: #3サーキュラー発送まで

前の時期はシンポジウム決定へ至るプログラム委員会での議論およびサーキュラーの発送が主たる作業であったが、1991年春以降は、代表委員、各シンポジウムのコンビナーおよび国内、国外からの参加予定者との、困難で、時間のかかる、また行き違いなどから様々なトラブルが発生しやすい作業が中心となった。

シンポジウムは原則として半日(口頭発表10論文、ポスター発表10論文程度)とし、口頭発表論文のうち6~7本は、コンビナーが事前に依頼、確保しておく招待講演とすることが申し合わされていたが、準備の遅れているシンポジウムも少なくなかった。12月1日の締めきり迄にIGC事務局に届いたアブストラクトは約3000通であったが、論文数が10本に満たないシンポジウムも少なくなく、この段階でいくつかのシンポジウムはキャンセルされ、あるいは他と統合された。一方、多数の論文の集まったシンポジウムは原則半日の日程を一日にのばした。

プログラム作成上の最初の困難は、コンビナーへのアブストラクトの配布作業であった。アブストラクトには、どのシンポジウムで発表したいか明記

されていないもの、明かに筆者の勘違い、読み違いで、間違ったシンポジウム番号が記されたものが多数あったことである。シンポジウムタイトルがいずれもかなり限定的であるため、どのシンポジウムでも引取りようのない論文が多数宙に浮いてしまい、この事がプログラム編成作業を遅らせる原因の一つとなった。これらの論文は最終的には、プログラム委員会の権限で適当と思われるシンポジウムに含めていただいたが、#2サーキュラーの段階あるいは12月段階に、多様な内容、トピックスの論文を含められるような、一般的な名称のシンポジウムを作っておけば、この問題は容易に解決出来た。

第2の問題はIGC事務局ではなく直接コンビナー宛アブストラクトを送っていた人がいたことである。事務局で把握し、データベースに入力していたアブストラクトの数、内容とコンビナーが作成したプログラム中の論文が一致しないことになり、論文データベースとアブストラクト集作成の段階で大きな問題となった。またどういうわけか、全く同じ論文が複数のシンポジウムに登録されている例も少なからずあった。

第3の問題は、締めきりの延長である。12月10日段階で、日本人からの投稿は僅か500通であった。国内参加者数が少なくなることが心配され、結局締めきりは実質的に約2カ月延長された。このため、#3サーキュラー、プログラム、アブストラクト集の作成が遅れ、また作業スケジュールが大変きつくなった。

1月末迄に事務局に到着したアブストラクトは全て受理しコンビナーに配布、コンビナーはそれ

ぞれの外国人コンピーナーと相談の上、口頭/ポスターの別、発表順序、座長を決め、プログラム案を作り、2月20日迄にプログラム委員会宛送るようアナウンスされた。このころになると、コンピーナーへもプログラム委員会へも参加予定者から、参加の確認、あるいは論文の取り下げ等の連絡が頻繁にはいるようになり、一度作成したプログラムの変更を希望するコンピーナーも増えた。プログラム委員会では、2月からプログラム案の入力作業を開始、並行してシンポジウムの日程表作りにはいった。日程表は#1サーキュラーの大枠に従いながら、同一時間帯に同じスピーカーの論文をおかないよう、またコンピーナーの希望も出来るだけ取り入れて作成された。1992年3月19日、プログラム委員会最後の全体委員会で日程表が決定された。しかしプログラム内容の変更希望はその後も続いた。プログラム委員会幹事会としてギリギリまでプログラムの変更希望を受け入れようとしたのは、シンポジウム当日の講演キャンセルを最小限にしたかったからである。2回のカードの発送、シンポジウム前日ギリギリまでのプログラム変更、ポスターから口頭へのシフトのアレンジもシンポジウムに穴をあけないための努力であった。

4月上旬にはコンピーナーに協力して貰い、参加予定者全員に、シンポジウム番号、口頭/ポスターの別、発表日を知らせるグリーンカードを発送、5月には最終的な日程表のはいった#3サーキュラーを発送した。それぞれの国を出発前に参加予定者に自分の発表日程を知らせるには5月発送が期限であった。6月中旬には参加するかどうか最終確認をするため、改めて、発表論文タイトル、シンポジウム番号、口頭/ポスター、日程を知らせ(ブルーカード)、アンケートに答えてプログラム委員会へ返送するよう求めた。既に出発してしまった人も少なくなかったこの時期、アンケートの回収率は65%に達した。プログラム案の変更、入力作業はプログラム委員会、つくばの事務局、京都で並行して進められた。プログラムデータベースの完成が、会期中のプログラム変更作業と前日の掲示を可能にした最大の要因である。

3: 会期中

会期中の作業の第一は最終プログラムの決定である。各シンポジウムがスタートする前前日、ブルーカードの返事およびその時点での出席状況をコンピーナーに示し、コンピーナーはそれらに基づいて最終プログラムを決定、前日の午前中にプログラム本部に提出。プログラム委員会ではそれらを入力して最終プログラムを作成、その日の午後4時迄にはボードに掲示することが出来た。このように、コンピーナーと参加者の努力と協力により、口頭発表の穴は最小限に押えることが出来、シンポジウム会場から聴衆が消えると言う事態も起きなかった。しかし、直前でのポスターから口頭発表へのシフトにより、ポスター会場ではスペースの見積もりが困難となり、前日の割り当て作業は深夜まで続いた。会期中のプログラム変更は京都大学、同志社大学等京都グループとの共同作業であった。大きな問題もなくスムーズに進んだのは、その強力なサポートのお蔭であったことを特に記しておきたい。

会期中の第2の仕事は、コンピーナーから援助金関係の必要書類を回収することであり、一部のコンピーナー、参加者には、会場で直接現金を手渡す必要もあった。プログラム本部の狭いデスクにこれらの仕事が集中したため窓口の混乱はあったが、作業は特に問題もなく終ることが出来た。

おわりに

口頭発表/ポスター発表を含め、シンポジウムがいづれも活気ある科学的雰囲気満ちた最大の要因は、何といても参加者とコンピーナーの努力と協力であろう。準備期間と会期中を通して、連絡の行き違いなどからこれらの方々には不愉快な思いをさせたり、行き届かなかった点があったことをお詫びすると共に、全ての参加者の忍耐と努力と協力に心から感謝いたします。

KUSHIRO Ikuo and MATSUMOTO Ryo (1993): Report of Scientific Committee, 29th IGC.
